

手賀沼通信(第289号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は弟のエッセイを3編載せさせていただきます。後の2編は昨年届いたものです。

84歳だぞ！

新田自然

まもなく84歳になる。早いもので、還暦からさらに2度目の「寅」が回って来たのだ。せっかく長生きしてここまで来たのだが、このピリオドには何の祝意もない。60歳の還暦から、10年目に古稀(70歳)、7年で喜寿(77歳)、3年で傘寿(80歳)、8年で米寿(88歳)、2年で卒寿(90歳)、あとは白寿(99歳)まで9年かかるのである。還暦から喜寿まではまだ若いので、それくらいの期間があっていい。問題は、傘寿から米寿への8年が開き過ぎているように感じるのだ。今の寿命からすれば、傘寿から米寿までの間にお呼びがかかる人が多い。その間になにか長寿記念日があっていい。84才に折角干支が回ってくるのだから「箸寿」(84=ハシのしゃれ)とかを設けるべきではないか。なにも自分が祝って欲しいわけではないが、バランス感覚がそう言わしめている。

平均寿命を過ぎて感じることもある。身体的機能劣化は言えはきりないが、やたらと時間が早くたってしまうのである。それまでも時間の経過を早く感じることはあったが、ここに来て感じるスピードは、次元を異にする感覚である。時間の経過には質量感が伴うものだが、それが無い、駅のホームの時刻表示板のように、パタパタと切り替わってしまうのだ、多分それは中身が薄いからだだろうが、時間の感覚においても、幼児返りをしているからとも思われる。先日「鎌倉殿の13人」を見たのに、また見ることになった。それにしてもこんなに早くては、貴重な1年が瞬く間に過ぎてしまう。

コロナのせいもある。旅行もしない、コンサートにも行かない、美術館に行くわけでもないし、月1回の街道ウオークも、月2回の文芸サークルもない。毎日のルーティンは朝の散歩と、スーパ

一の買い物だけだ。わずかに四半期に一度のネット俳句会という惨状だ。だから早く来いという期待もなく、書かねばならぬという切迫感もない、本を読もうと思っても、目が疲れるし根気も続かない、感動も達成感も、何もなく、時間だけが過ぎてしまう。このままではすぐに天国からの招待状がやって来る。

そう言えば70代のころにはいなかった、あの得体のしれないヤツが視界の隅に住み着くようになった。そいつは湯飲み茶わんに描かれた「寒山拾得」のようなあいまいな笑顔をして、いつの間にかこちらを向いて笑っているのだ。微妙な間合いを取って徐々に間を詰めてきている。気になるので、こちらから近づこうとすると、笑いながら距離を取って逃げたりもする。抱きつかれたくないので、抗がん剤も飲んだし、マスクも、手洗いも、3回目のワクチンもした。今しばらくは、カラスと対峙するがごとく、間合いを取るしかない。

話が跳ぶが、イギリスのエリザベス女王は寅年である。1926年4月21日生まれ、御年95歳、おそらく世界最長寿の寅ではないか。そして今年は寅年、見事に年女である。かの国には、干支なるものが存在しないので、当然ながらご存知ない。まあそんなことはどうでもよい、そこに私めが入り込んでくるのは、なんと誕生日まで一緒なのだ。ひとまわり上の同じ4月21日に誕生日が来るのである。この奇跡を発見したのは最近のことであるが、この大発見に興奮してカミさんに言ったら「ああそうですか」という返事が返ってきた。たしかに、ただそれだけのことで、それで世界が1コマでも動くわけでもない。

しかし、このことは私にとっては、大変に大きなことだ。まだひとまわり、つまり12年間という目標とすべき時間を与えてくれるのだ。がん手術後の5年生存率などというものに脅されているわが身にとっては、そこまで行けるかもしれない、というメルクマールだ。

女王陛下は大変にお忙しい、「カミラに王妃の称

号を与えたい」との発言とか、王室一族にもいくつかのゴシップ、さらに最近では、新型コロナウイルスに陽性となっても、風邪のようなもの、と言ってみたり、大変お忙しいのだ。お写真で見る限りでは、お元気で、おしゃれにも気を配って、白髪にワンカラーでふじ色のドレス、帽子、スカーフ、ブローチ、などでキリっとお締めになって、充分にお美しい。彼女には、くだんの寒山拾得も近づけないのだろう。

そいつを近づかせないため、女王陛下のように旋風を巻き起こさねばと、自分に課していることがある。公務というものがないので、すべてプライベートである。

毎朝5時からの朝のウォークを励行し、6千歩以上歩き、ストレッチをする、「ワーオ」と叫んでみたり「パピブペポ」と言ってみたり、大きな声を出す、歌も唄う。人がいると異常に感じるかもしれないので、暗闇を見透かして実行しているが、聞いている人はいるようだ。出会う仲間とおしゃべりも楽しむ、話題は人によって異なる、異次元の世界があって、それについて行くのが楽しい。最後に富士山を眺めて、朝の行事は終わる。

日記をつける、日記には、かなり細かく書く、時刻、血圧、気分など、その日の出来事を出来るだけ細かく、最後に富士山が見えたか見えなかったかまで書くのだ。俳句を1日1句作る。料理にもトライする、最近始めたスマホによるライン仲間との交信もやる。とここまで書いて来て、なんと実に小さな事ばかりだと自嘲する。

ま、いいか。どうせ小さな老人の小さな目的、95歳の女王陛下から見れば若寅か子猫のような存在だ、生きていても、死んでもニュースにもならない。だが当事者にとっては生死事大だ、それはエリザベスも私めも変わりはないのだ。

あと2ヶ月もすると、女王陛下と私の「寅の誕生日」を迎える。華やかなレッドワインでも買って来て、乾杯でもするか。(2022/2/22)

親水公園初夏 白に染まった花舞台

新田自然

あじさいが咲いている。

あじさいにも色々あるが、私には、白から薄緑に、そして青く染まってゆく昔からのあじさいが好ましい。いずれの色も淡く、この時期を代表す

る花にふさわしい色あいである。

ここ引地川親水公園は、いまやさくらの名所となってしまったが、あじさいの花をふんだんに見ることができる名所だとも言える。長さで500メートルを超えるあじさいの列が迎えてくれるのだ。

毎朝4時45分から6時半くらいまで、雨の日以外ほとんど毎日、公園を歩いている。川を挟んで兩岸に遊歩道があり、桜並木が続く。その周囲は水田で、田植えや稲刈りを見ることができる。この地が荘園となった時代、あるいはもっと以前からの古道があり、石造りの道祖神や道標、お地藏様も見ることができる。公園を1周するのに4キロばかり、道路も幾筋かあって、それぞれに季節を楽しめる。美味しい空気、清流と鯉、野草や花々、果実、鳥たちの囀り、最後には富士山も眺められる素晴らしい公園である。

雨粒が緑の葉に残り、かたつむりが触角を伸ばして、動くともみえない。

あじさいはこの季節の花舞台の立役者、花の行列が延々と続いており、列はあるところから花色を変えたり、がくあじさいになったりする。あじさいは大きく丸く、がくあじさいは、少し大きめの花が、つぶ状の花びらを取り囲んで、丸い花飾りのついた、少女が被る麦わら帽子のようだ。

やまぼうしの、白い十字の花も際立っている。公園の入り口に2本ばかり、歓迎するように立っている。あれは中山道木曾路だったか、緑一色の田圃があって、粗末なバス停がぽつんと。横に赤い郵便ポストがあって、やまぼうしの木が1本だけ、白い残雪の遠山をバックに、いつ来るか分からないバスを待っている。昼下がりの街道道は、みんな所在無げ。時間がゆっくり過ぎていた。

田植えが始まって、水田は豊かに水を溜め、空を映して、雲が田圃の中に沸き立つ。目を閉じると、地球が水におおわれているように見え、それがたとえ幻想であったとしても、ここに立って稲田に吹く風を感じていると、水に覆われた青い地球が浮かんでくるのだ。

水田の脇、というより水田のひと隅に、はなしょうぶが植わっている。水田の空にしょうぶの花も映っている、白と紫が際立って鮮やかである。老農夫が手植えたという古代米の稲田、すくくと立った和服姿の佳人の趣をして、花も葉もみずみずしい。この時期の花は、みんな女性のたおや

かさを見る風情だ。この時期の雨を、半夏雨という。

この季節が特に好きである。晴れの日が少ないが、田畑に水があふれ、山も田圃も緑一色に覆われる。その中では、とりわけ白い花が目立つのだ。山にあったさくらやふじが色を失って、山全体が緑一色になる。そのなかにあって白が際立つのだろう。

みずきの花は、白く平たく、大きさの割には地味で、池の縁や、神社の森を守っている。

うつぎの花を、うのはな、と言う、うつぎにはいろんな種があって、おおらかな古代人は、たとえ別種の木であっても中空の枝を持った木を空木（うつぎ）と呼んだ。ばいかうつぎも純白である。谷中にある朝倉彫塑館の中庭には、池をとりまいて、姿のいい石が配置され、ところどころ、うのはなが白く配置されていた。先生は白を愛で、庭いっぱい白い花を配したが、1本だけ、赤いさるすべりの花をおいた。その光彩は辺りを睥睨したが、むしろ白がますます勢いを増したように感じた。

他に、公園で白い花を探したら、いっぱいあった。えごのきが1本だけ小さく白い花をつけていた、草花では、しろつめくさや、はるじおんなど、いたるところにあって、白は公園一帯を彩る。

少し色のついたものもある、その中で挙げるとすれば、ねじばなを指名したい。別名もじずりそう、薄い桃色の小さな花、10センチばかりの、たよりなげな小さな花であるが、この花には天を衝く意志を感じる、高みを指してよじ登って、宇宙にまでとどく意志を感じるのだ。万葉集に詠われた恋の歌、淡い恋か強い恋か、永遠の恋かもしれない。

しつこいようだが、あとひとつだけ、ねむ(ねぶ)の花を挙げねばなるまい。花の形は3センチばかり、この花をパフ代わりにして、女性の頬を染めてみたい。かぼそい白の糸が先端に行くにしたがい、うす桃色に染まる。淡い芳香があって、樹下に漂う。夕方になると、葉が眠るように閉じられる。芭蕉は、雨に烟る象潟を、越の国の美女西施に例えたが、まさにこの季節を代表する最後の花である。

ねむの花を最後に、激しく主役が入れ替わった初夏の花舞台は幕間を迎え、あとは鮮やかで濃い色の、夏の花たちが登場する。その間公園一帯に

しつらえられた、木のテーブルとベンチに腰かけて、歌舞伎座の幕の内弁当でもひろげてみたい。

花の名前を、漢字で表現するか、平仮名か、あるいは片仮名か、それは文章の性格によるものだろうが、私はこの時期の花を、あえて平仮名で表記してみた。このみずみずしい時期、わが国古来の花が多いなか、ひらがなで書くことによって、世界で最も美しい時期の花を表現してみたかったのだ。佐々木幸綱氏は最新の歌集でひらがなを多用して、言葉の持つ音楽性をひらがなで表現したかったそうだ。だが漢字で書いた方が分かりやすいものもあり、到来種はどう書くか、それらの花まで無理にひらがなで書くと、読みにくいし、違和感も出る。どう書けば、季節感があって音楽性のある文章になるのだろうか。(2021/6/27)

親水公園花舞台 - 秋編 -

新田自然

秋が少しずつ濃くなってきている。やけに暑い日があったり急に冷え込んだり、ちょうど春先の「三寒四温」の逆を行っているようだ。富士に初冠雪があり、それが融けて、また白くなり、そんな繰り返しがあって秋は深まってゆく。

ここ親水公園の植物にも、確実に秋色が深まっている。芒や葦、蒲の穂が着実に熟れて風にそよいでいる。稲は黄金色に輝き、彼岸花の赤は妖しい、木犀はオレンジに金茶をまぶして強く香る。セイタカアワダチソウは黄を煮詰めた色を放っている。秋の色香はどこか成熟した女性の雰囲気醸す。

公園の周囲は田んぼである。稲の黄と、彼岸花の赤、このグラデーションは最も美しい日本の秋である。歩いていると処々に彼岸花があり、田んぼの際にワンショットでそれを見た時、懐かしいものに会ったような嬉しい気分になった。刈り取った稲は稲架(はさ)に掛けられて干されている、四国などでは稲木と呼ぶ。干し方も呼び方も地域によっていろいろあり、それぞれの秋の景観をなす。先日、安野光雅展を観に行ったが「京丹後の稲刈り」という絵があって、高く4段の稲架掛けが見られた。絵の中には彼岸花の朱は見当たらなかった。気候や田んぼの状態などによってさまざまに変化するのだろう。

彼岸花は不思議な花である。律儀に秋の彼岸の頃咲いてくれ、それも一斉に咲いて一斉に枯れる。

土の中から茎を出してその先に花をつける。葉は花の後に出て翌年の夏にはなくなる。この花は日本中どこに行っても見られるので、どうやって広がったのだろうと思っていたが、この花が種子を作らないため、株分けでしか増える手段を持たず、人の手で植えられたのだと辞書にある。有毒植物でネズミ、モグラなどの害獣対策として植えられたと、またこの花が秋の彼岸の時期に咲くところから移植されたともいわれる。稲作が全国に広がるなかで、この花も人の手を借りて全国に広がっていったのだろう。祖先たちのこの花への愛着と、移植にかけた膨大な時間を思う時、ある種の感慨を持たざるを得ないのである。中国原産の秋の色はすっかりわが国のものとなっている。

今年モクセイの香を嗅いだのは9月のことだった。我が家の入り口にはこの木があって、毎年その香によって秋を知ったものだ。今年は車のラジオでモクセイが咲いたと聞き、確認してみると、すこし花つきは悪いがたしかに咲いている。その時香りを嗅いだのだが、「今年の花はなんとなく薄いね」と妻と語り合った。

そしてつい先日のこと、公園を歩いていて、その香りが強烈に襲ってきたのだ。「そんなバカな」と近寄って見るとなんと満開で、木の下は花びらが零れ落ちている。桜の狂い咲はよく見るが、モクセイが2度も蕾をつけるとは、かつて経験しなかったことだ。急ぎ戻ってネットを開いてみると、今年の2度咲きについて声が寄せられていた。「モクセイの2度咲き」これも暑かったり寒かったりという気候のせいかもしれぬ。83年も生きていてまだ知らないことが多い。

この木も中国原産で雌雄異株、江戸時代に園芸種として雄株のみ輸入したようで、実をつけないので挿し木でしか増えない、それが全国に広がって行ったのは、その甘くて強い香りゆえ。入浴剤や、茶や酒に混ぜるなど、日本人の心をとらえて離さなかったのだろう。

公園の南には小さな築山があって、高さ10メートルくらいか、頂上から富士山が眺められ、その下には湿地があって木道が設えられている。ガマやススキがあって、雨の翌日などには水位が50センチくらい上昇する。そこにあるのがタコノアシ、かつては水田の荒れ地によく見られた水生植物だ。秋になると先端が放射状に割れ蛸の足状に広がる、おまけに赤く染まり、それでタコノア

シと名づけられたのだろう。在来種で日本のほか東アジアにも生息しているようだ。農薬の使用などによりその数を減らし、一時期準絶滅危惧種にも指定されていたと聞く。ここではそのタコノアシの紅葉？ も観ることができる。今ちょうどオレンジに紅をまぶしたように赤くなっている。

私は多くの人にこのタコノアシの存在を伝え、案内している。いわば「タコノアシ宣伝員」というところか、毎日のように色づき具合をチェックするなどして悦に入っている。この公園のタコノアシもずいぶん減った。絶滅危惧種として保存活動が必要かもしれない

その近くにセイタカアワダチソウが黄色く染まっている。昭和40年代、花粉症の原因だとマスコミで叩かれた外来植物である。同じ帰化植物のブタクサと間違われ、後に無罪となったこの花の記憶は、私が社会人となった時の記憶に重なる。あの頃からこの花の濃厚な黄色が何故か好きであった。またこいつは、その強い性質がススキと生殖地を争ってススキを滅ぼしてしまうと恐れられた。アメリカの荒れ地に繁殖し、穏やかな日本の自然に侵入し、堤防まで破壊してしまうと恐れられもした。

それがいまや、猛々しい姿を変え、ススキと分け合って並んで秋を楽しんでいるようなのだ。調べるまでもでもないことだが、わが国にある雑草の仲間外来種は多い。どこ国にあっても生存し繁殖し続けるたくましい外来種と、人の手を借りて生存域を広げる知性派、それらが秋の景色のなかに収まっている。

よく見ればこの風景はほとんど自然のものではないことに気づく。人々の営々とした植物へのいとおしみが風景を作り出しているのだ。道祖神脇に野菊がある、これだって誰が、いつ植えたものか、そんなことに思いを馳せている。それがまた楽しい。

やがて11月、この月をもって、楽しませてくれた花の舞台は閉じられる。毎朝5時、ほとんど変わることなく歩いているが、花はなくとも、それはそれで楽しい。未明、冬の大3角、オリオンが輝き、やがて白み始める河岸段丘、川霧が立ちこめる中に、嘴を羽根にうずめてうずくまる水鳥、赤く輝き始める富士。動かないようでも少しずつ変わって行く季節の息吹を感じるのだ。ありがたいう里山公園がここにはある。(2021/10/18)